

1 事業名 青少年教育指導者ミーティング in S A N B E

2 必要性

国立青少年教育振興機構の平成21年度事業方針として、「青少年教育施設、青少年団体間の連絡・協力の促進を図ることを目的とした事業を実施するとともに、事業の実施によりどのような連絡協力の体制の構築につながったかの把握に務める。」とあり、青少年教育関係機関・団体等の全国的なネットワークづくりや地域のネットワークづくりを推進する方策が示されている。

本事業は本所が先導的モデル的事业等を実施した成果を、公立青少年教育施設・青少年団体等に普及させることを主たる目的とした事業であり、国立青少年教育振興機構所属の施設として積極的に取り組むべき事業である。

3 趣旨

各地・各施設で青少年教育施設・青少年団体を対象とした協議会が年に数回程度開催されているが、多くの場合、所長・課長等の管理職が中心となった協議の場で終わっている。その中で各施設が実施している企画事業の成果報告等については、モデル事業の事例発表・質疑応答等のみとなっていることが多いのが現状であり、実施事業の成果についての理解が今ひとつ深まっていないと感じることが多い。以上の状況を踏まえ、本事業は青少年教育施設・青少年教育団体に所属し事業を企画・運営している担当者が集まり、企画事業に関する「プログラムの企画立案」や「ボランティアの活用」そして「参加者の安全管理」などのテーマを設定し、情報交換を行う中でお互いの事業について理解し、企画運営に関する学びを深めると同時に、当施設の事業成果を確実に広報・普及させることをねらいとしている。

4 協力

島根県教育委員会、島根大学教育学部附属教育支援センター、島根県立青少年の家(サン・レイク)、島根県立少年自然の家、鳥取県立大山青年の家、鳥取県立船上山少年自然の家

5 期日

【第1回】 平成21年5月11日(月)～12日(火)

【第2回】 平成22年2月25日(木)～26日(金)

6 参加者

(1)募集対象 山陰地方の公立青少年教育施設・青少年教育団体の事業実施担当者
各施設のボランティア

(2)参加人数(当所職員を除く。)

【第1回】 11人

【第2回】 7人

(3)参加者分析

【第1回】

繁忙期にも係わらず、山陰（島根県・鳥取県）地区の全公立青少年施設（5施設：三瓶青少年交流の家も含む）の参加があった。また、大学生ボランティアの派遣をしている島根大学教育学部附属教育支援センターの准教授3名の参加があり、幅広い連携が構築できた。

【第2回】

山陰地区5施設のうち、4施設の職員の参加があった。（1施設は事業等の関係で、参加できなかった。）また、施設ボランティアの参加（2施設）とボランティアを派遣している島根大学教育学部附属教育支援センター准教授の参加もあり、ボランティア事業を検討する上で充実した研修となった。

(4)参加者地域 【第1回】 島根県9名 鳥取県2名 【第2回】島根県6名 鳥取県1名

7 参加経費 【第1回】 2,180円
【第2回】 1,800円

8 事業の内容

(1)事業の特色

本事業は参加対象を各施設・団体で実際に事業を企画運営している担当者としていることで、一般的に行われている協議会にはない非常に濃い内容の広報・普及ができる場を設定していることが特徴である。また、協議会を年度当初と年度末の2回実施する予定であり、1回目の協議会では各施設・団体が今年度実施する事業に関する連絡・相談の場を設定し、事業に対するモチベーションを高め、2回目の協議会では今年度実施した事業の成果報告を行い、相互に評価をすることで来年度の事業企画につなげるものとする。さらには、事業の担当者同士が集まり様々な想いを共有する場を設定することで、お互いに「青少年教育に携わっている仲間」という意識を高め、ワーキングネット構築の一助とすると同時に、国立青少年教育振興機構の事業の細やかな部分までを確実に広報し、普及できる場を作るものである。

(2)企画のポイント

【第1回】

企画のポイントは大きく2つある。

- ・各施設等の共通テーマを設け、研修を深める。
- ・当施設のプログラムを体験し、普及につなげる。

平成20年度行った事業の際に、平成21年度1回目のテーマについて参加者に案を出してもらい、それを参考に今年度のテーマ「危機管理」を決定した。また、それ以外に当施設が推奨している体験学習法を用いた「グループワーク登山」を体験してもらうことで、公立施設への体験学習法の普及をねらった。

【第2回】

第2回の企画のポイントは以下のとおりである。

- ・各施設のボランティア事業についての意見交換
- ・コミュニケーションワークの指導者研修

そのために、学生ボランティアの参加しやすい2月の時期を選んだ。またコミュニケーションワークの研修では、当所のプログラムSAP（三瓶アドベンチャープログラム）を体験することで、普及に努めるようにした。

(3) 広報のポイント

【第1回】

文書以外の広報として、山陰地区の公立青少年施設に、今回の事業の趣旨を直接広報や電話で説明し、参加を促した。また、鳥取県の2施設については、所長・次長が直接出向き、趣旨説明を行い協力を要請した。その結果、繁忙期にも係わらず、職員を派遣して下さった。（鳥取県の1施設は、職員が参加できないため、所長自ら参加して下さった。）

【第2回】

各施設のキーになる職員に電話連絡をし、参加を促した。また、あわせてボランティア担当の職員にも核になる施設ボランティアの参加を促した。

(4) 日程表

【第1回】5月11日(月)～12日(火)

1 日 目	10:30	12:00	13:00	17:10	19:00	21:00
	受付	【オープニング】 ・ねらいの共有 ・アイスブレイク紹介	昼食	【伝達講習・ワークショップ】 1 平常時の危機管理について 2 緊急時の危機管理について 3 体験：模擬記者会見	夕食	【ミーティング】 ・各施設の現状や課題について
2 日 目	6:30	9:00	14:00	15:30		
	起床 朝食	【プログラム体験：女三瓶絶景登山】 体験学習法を用いた女三瓶グループワーク登山と室内池見学（サイクリング&リフトを利用）	【まとめ】 ふりかえり・わかちあい 次回の展望	解散		



危機管理研修の模擬記者会見の様子



「女三瓶絶景登山」山頂付近の参加者

【第2回】 2月25日(木)～26日(金)

1 日 目	13:00 13:30		15:30		17:10	19:00	21:00
		受 付	オープニング ・アイスブレイク ・交流の家プログラ ム「クップ」	【協議】 各施設のボラン ティアに関わる 事業について	つた ど い食	【ミーティング】 各施設の現状や 課題について	入就 浴寝
2 日 目	6:30	9:00	12:00	13:00	14:00		
	起つ朝 ど 床い食	【プログラム研修】 S A P (三瓶アドベンチャ ープログラム)	昼 食	【まとめ】 ・来年度の展望 ・ふりかえり わかちあい	解 散		

(5)運営のポイント

【第1回】

「危機管理」研修については、平成20年度教員研修センター主催の校長・教頭等中央研修（事業推進室長が参加）で行った内容を伝達する形で行った。参加者の集中力や緊張感が持続するように、「模擬記者会見」を後半にセットした。体験学習法の公立青少年教育施設等への普及が進むように、グループワーク登山を体験学習法のサイクルで実際に体験してもらいながら、参加者の理解を図った。

【第2回】

ボランティア事業の意見交換で本音が出やすいように、最初にアイスブレイクやプログラム体験（クップ）を行い、参加者の心の壁を取り払った。この活動を重視したことでボランティア事業の各施設の成果や課題が多数出たほか、意見の絡み合いがみられ、深まりのある話し合いとなった。

(6)安全管理のポイント

【第1回】

事前に活動場所の事前踏査、周到的な物品準備、スタッフの共通理解を図った。「危機管理」研修については、事前に中央研修で「危機管理」講師にレジュメと内容を伝え、許諾を得た後に行った。

【第2回】

雪のあるケース、ないケース、雨の降ったケース等、あらゆる天候状態に対応できるプログラムを事前に準備をしておいた。また、参加者の心の壁を取り払うアクティビティを多く準備しておき、参加者の状態を判断した上で、柔軟に実践した。

(7)アンケートの満足度・主な記述

【第1回】

満足度（アンケート回答者11人中）満足11人（100%）

- ・今回危機管理研修として内容の濃い、充実した研修となりました。特に、記者会見のシュミレーションは良かったです。

- ・危機管理というものが、現在今後の学校現場でも大変重要になってくるもので私にとってぜひ参加したいと思うテーマでした。今回の研修内容にも取り上げられていましたが、「風通しのよい職場づくり」「危機管理意識を高める研修の持ち方」などについても学ぶ場があると喜びます。初めての参加でしたが、楽しく、充実した二日間でした。
- ・大変良い企画でした。サイクリング 登山も最高！リフトの利用も良かったです。各施設でそれぞれ出来るとさらに楽しめそうですし、何より勉強になると思います。

【第2回】

満足度（アンケート回答者7人中）満足7人（100%）

- ・話し合いだけでなく、実際に体験できることが良いと思います。
- ・施設職員の方々とボランティアが意見を交えて交流することで、より充実したミーティングになったと思います。
- ・ボランティアでも、施設によって子どもとの関わり方も違うことが分かり、他の施設の情報に興味も出ました。
- ・「ボランティア」をキーワードにして、情報交換ができたことに満足しています。各施設のボランティアの捉え方や考え方の違いがはっきり見えました。もちろん共通なところもあり、安心した面もありました。

9 成果と今後の課題

成果

【第1回】

- ・平成22年度から山陰の公立青少年教育施設で、本事業を持ち回り開催することとなった。山陰の施設長が集まる研修会で、持ち回りの順番も決まった。
- ・参加者が今回行った「危機管理研修」を参考に、教員が集まる会で危機管理の研修会を行った。

【第2回】

- ・施設職員だけでなく、ボランティアも参加したことで、各施設のボランティア事業の共通の課題が明確になった。

課題

【第1回】

平成22年度より、年2回の内1回は、持ち回り開催となったが、事務局は引き続き三瓶青少年交流の家が担当することとなった。将来的には事務局も公立青少年教育施設が持ち回りで行うようにしていきたい。

【第2回】

- ・関係施設の職員とボランティアが参加できるように、広報や事前連絡を綿密に行う必要がある。

10 普及計画・普及実績

・平成20年度より、本事業の持ち回り開催について、意見やアドバイスをもらっていたが、今回持ち回り開催（平成22年度は、6月に鳥取県立船上山少年自然の家で第1回を開催）が実際に決定し、年度ごとの担当施設も決定した。

（担当 錦織 修一）